シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　前岩手県立花巻北高等学校長

第８回

マネジメントはこうでねえと

□ある講演会にて

日本創造学会でアクティブ・ラーニングに関する講演を行ったことがありました。

内容は、子どもの主体化の話が中心でした。教師は、キャッシー・デビットソンやマイケル・オズボーンやリンダ・グラットンなどの言葉を判で押したように引き合いに出し、社会のドラスティックな変化を語り、だから生徒は変わらなければならないと唱えます。そして、子どもを学校教育の内側、つまり、教師の掌の上で変えようとします。でも、私が思うのは、そもそも子どもは主体的な存在だったのではないかということです。それを教育という「社会化」のフィルターによって、「主体な」自分がどんどん潜在化してしまっているのではないかという気がするのです。とすれば、教師は、生徒を変えようと、過剰に足し算をするのではなく、むしろそんな過剰な自分の鎧を脱ぐ、引き算をすることが必要なのではないか。つまり、子どもたちに「知識や技能」と同様のやり方で「主体性」までを叩き込もうとするのではなく、そもそも既に持っている主体性を「あるがままに」顕在化させるように、教師のマインドや学校教育の在り様を変えていくことが必要ではないか、といった話ですね。

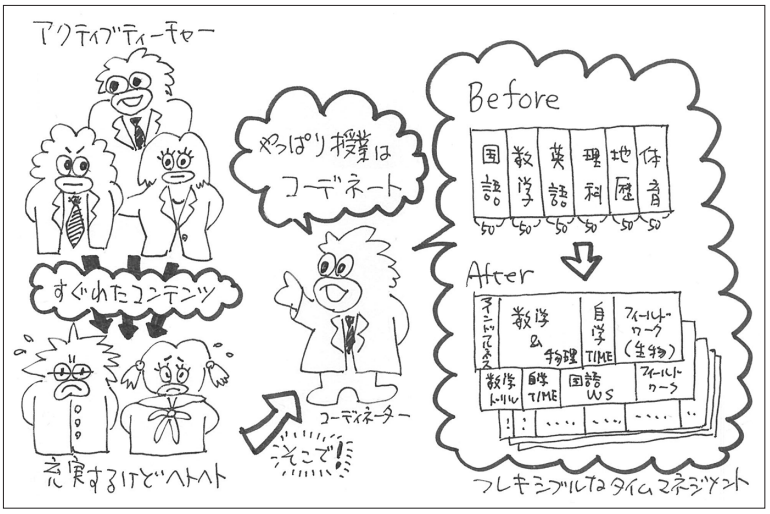
□管理職の使命

さて、私の講演後に行われた、石井力重さん（アイデアプラント代表）のワークショップがとても面白かったのです。そのワークの中で、アイデアスケッチを描くという活動がありました。「主体的、対話的、深い学びを達成するための方策を考える」というテーマで、思いつくアイデアを紙に描き、それを共有し、深めていくというものです。想像力・創造力がかきたてられ、とても楽しい時間を過ごすことができました。私のアイデアは次頁の図に示すようなものです。

「主体的で対話的で深い学び」を実践しようと、アクティブなティーチャーたちが、優れたコンテンツを開発し、一生懸命授業を行います。それは素晴らしいことで

しょう。でも、それをシャワーのように浴びせられる生徒は結構タイヘンです。

そこで、それぞれのコンテンツの充実から、そのコンテンツ相互のつながりをコーディネートすることを考えるという提案です。基本的に50分×6コマなどという時間は固定しません。例えば、月曜の1時間目は10分にしてマインドフルネスを行うとか、ある日の数学は20分で別の日は120分にするとか、この日は化学と歴史の合教科で行う等々。そういう教科間の連携を促しながら学習者とともにカリキュラムを創造していくのです。



我ながら面白いぞ、と思いながらも、私は管理職として心にひっかかっていたことがありました。最後にそのことを記しておきます。

特に最近、教師だけではなくあらゆる人たちが教育を語るようになってきました。いろいろな課題が出され、そして様々な提案がなされます。もちろん、このように広く教育が語られることは大変好ましい状況だと思います。

しかし、私たち教員は、そういう意思と言葉を持つだけではなく、それを実体化するものでなければならないのです。するとその時、「学習指導要領の法的拘束性」、学校の人的・物的運営管理は教育行政が行うという「設置者管理主義」、「大学入試への対応」、あるいは「格差や貧困」など多くの壁にぶち当たるのです。

それは「教師のマインドセットを書き換える」「カリマネで組織を変える」などとはまた次元のことなる構造的な問題です。そのような中で、責任の所在をすべて教師や学校の在り方に求めるといったロジックでは、実体化は果てしなく厳しいと思うのです。では、もはや公教育はアカンと見切りをつけて、オルタナティブの方向へパラダイムを転換すればいいという話になってしまうのでしょうか。

でも、多くの教師は、そんな火中でもがきながらも、火の粉を振り払い、健気にその枠の中で工夫を凝らし、目の前の子どもたちをハッピーにし、彼らと喜びを分かち合っていこうとしているのです。

管理職の使命は、そんな彼らに光を当て、ダブルバインドにメスを入れる存在にならなければと思うのですが、結局私は自身の無力を感じるばかりでありました。

でもそれにめげずに、志を共にする仲間と語り、支え合いながら光を見つけていきたいものですね。